

棕櫚の主日 説教 「十字架の言葉」要旨

牧師 黒田直人

日本キリスト教団藤沢教会 2023年4月2日

ルカによる福音書 19:28-44

棕櫚の主日を迎え、受難節の歩みもいよいよ残すところ一週間となりました。そこで、受難週と呼ばれているこの一週間、私たちはイエス様と十字架の道行きを共にすることで主の十字架と復活の出来事を実体験することになるのですが、ちなみに、受難週の最初の日をなぜ棕櫚の主日と呼ぶのか、それは、メシアキリストとしてエルサレムに入城されるイエス様を、群衆が棕櫚の葉を振り、歓呼の声をもってお迎えしたと、ヨハネによる福音書にあるからです。ただ、マタイ、マルコ、ルカのいわゆる共観福音書では、群衆が棕櫚の葉を振るシーンは描かれてはおりません。特に、ルカでは、他の福音書にある「ホサナ」、「ダビデの王国」、「イスラエルの王」とといった、いわゆるユダヤ的な色彩の濃い表現は用いられてはおりません。それは、このルカによる福音書が異邦人を対象として語られているからです。ですから、他にはないルカ的な表現として、「天には、平和、いと高きところには栄光」と、クリスマスに用いた同じ讃歌をもってイエス様を描いているのはそのためです。それは、十字架から復活へと向かうこの最後の一週間が、ある限られた人々だけのものではなく、異邦人を始めとしたすべての人に救いをもたらす出来事であったと、ルカは、イエス様の物語をこのように普遍的な出来事として理解したからです。それゆえ、こうしてこの御言葉に聞いていく者は、イエス様のエルサレム入城を同じように歓呼の声をもって見つめることにもなる、普遍性という言葉から推察することはこのことです。そして、そう考えられるのは、イエス・キリストの出来事が閉ざされたものではないからです。それゆえ、御言葉が「弟子の群れはこぞって、自分の見たあらゆる奇蹟のことで喜び、声高らかに神を讃美し始めた」と語るように、御言葉を正しく理解する者は讃美の声を自ずと声高らかに上げることになるでしょう。

しかし、膨れあがった弟子たちの群れとは違い、この日、この御言葉に聞いている人数は、日本では、その何十分の一、何百分の一の人数だと思えるのです。ですから、それが求められているからといって、讃美が個人的なものである以上、そうそうできるものではありません。ですから、讃美

の声を上げるには、この弟子集団と同じ気持ちになることが大切なのですが、それにしても、彼らはどうしてこれほどまでに気持ちを高ぶらせているのでしょうか。それは、これまで学んできましたように、イエス様が生きた時代、ローマの支配下にあったイスラエルでは、政治的な解放者としてのメシア待望論が高まりを見せていたからです。39節の「もしこの人たちが黙れば、石が叫び出す」と仰るこのイエス様の言葉は、ローマ支配下にあった当時の人々のメシア待望の強さを現しているとも言われているのはそのためでもあります。ただ、39節の御言葉の解釈については、どうやらいくつかに分かれるようです。

先ず一つは、今申しましたように、一端湧き起こった流れは止められないという理解です。つまり、メシア待望の勢いの強さを語っているということなのですが、もう一つは歴史的な事実を踏まえた上での解釈です。エルサレムはイエス様の十字架と復活の出来事からおおよそ40年後、ローマの侵攻によって神殿は崩壊し、エルサレムは完全に破壊し尽くされることになりました。ですから、「石が叫び出す」と言われていることは、エルサレムの町と神殿の崩壊をイエス様が予見してのことで、それゆえ、その直後にイエス様が語ったことは、この神殿崩壊の事実に基づいてのことだと言われています。そして、そのそれぞれを視野に入れながら、ここに登場しているのがファリサイ派の人々です。ですから、イエス様にももの申したファリサイ派の存在は、また別の意味で大きな意味があったと言えるでしょう。なぜなら、先ほどの39節の「石が叫び出す」とのイエス様のお言葉は、ファリサイ派の人々が「先生、お弟子たちを叱ってください」とイエス様に向かって発したこの一言を受けてのことであるからです。そして、彼らがイエス様に対しこのようにもの申しているのは、膨れあがる弟子集団の気持ちの高ぶりを見て、彼らがある種の恐れを抱いたからです。そして、その恐れとはつまり、民衆によるメシア待望の高まりが占領者ローマを刺激し、更なる抑圧を招くことでもありますが、それが事実となったことを歴史は私たちに伝えてくれているのです。ただ、そこで興味深いことは、膨れあがるイエス

様の支持者の中にこのファリサイ派の人々がいて、イエス様に至極まっとうな意見を言っているということです。

このようにメシア待望の高まりと、ファリサイ派の人々がこのことを危惧していたということは、この一連の動きがそれだけ勢いがあったからです。しかも、この動きは、イエス様に敵対する人々をもイエス様を支持する側に回らせるほどであった。ところが、気持ちを高ぶらせながらも、他の大勢の人々とは違って冷静沈着に現実を見つめる者がいた、それが他ならぬイエス様に敵対するファリサイ派の人々であったということです。ですから、同調圧力に負けて、みんな一斉にということではないところに、私などはついつい興味を持ってしまっているのですが、ただ、それがファリサイ派であったということが、恐らくは、私たちの目を曇らせることにもなるのでしょう。そして、それは弟子たちも同じでした。まただから、そのことが返って人々の高揚する気持ちを高ぶらせることにもなったのでしょう。従って、人々の高揚感はそのような冷静さを失った者の陥りがちな姿を現しているとも言えるのですが、ですから、宗教に対する拒否感が高まりを見せている昨今、十字架へと向かうその歩みの中に、かつての反対者たちの姿が複数含まれ、そして、その彼らがイエス様に向かって自由にものを言える環境にあったことは、宗教を取り巻く現状においては、たとえ、その言葉をイエス様が遮ったとしても、私たちが覚えておいていいことのようにも思うのです。

さて、少し横道に逸れましたので話を元に戻しますと、このようにたった一言を巡ってもその解釈は幾通りにも分かれている現状にあって、そして、その正しい理解のために、私たちがそのいずれかを選ばねばならないとしたら、私たちは、学者が示すいずれの応えを選ぶことになるのでしょうか。ただ、一つを選び、一つを選ばないということは、選んだ瞬間に、御言葉の正しい理解が私たちの選択の問題に置き換わってしまうということです。従って、そのことにはいささかの危うさを覚えるのです。特に、このいずれか、ということをお言葉がここで一番言いたいことであるとしたら、先ほど、申し上げたルカの普遍性という発想からは大きく逸脱することになり、そもそものところでその主張するところとは矛盾する結果を招くことになります。けれども、ここでファリサイ派の人々を登場させているように、ルカがここでいくつ

の選択肢を与えているのは明らかです。それゆえ、私たちはそこからいずれかを選び取らねばならない、そして、それはやはりイエス様と共に高揚感をもってエルサレムに入城していくことでもある、それがここでの結論であるとしたらどういうことになるのでしょうか。しかも、28節で御言葉は、イエス様が「先に立って進み、エルサレムに上って行かれた」と記すのです。ですから、エルサレムに入ることも、石が叫び出すと語ったことも、イエス様のこの時の思いのすべてが現わされているとも言えるのですが、しかも、この日より私たちは、私たちの信仰の中心に一気にその歩みを進めていくわけですから、なおのこと、この結論に一気に傾いていくことが想定されます。ただ、繰り返しになりますが、普遍性こそがルカの主張を支えるものなのです。ですから、イエス様がもしそうした要求を私たちにしているとしたら、その要求は明らかな矛盾を含みます。しかも、イスラエルという国を破滅へと追いやり、流浪の民とさせていった最大の理由は覇権を握っていたローマへの徹底的な抵抗にあったわけですから、神殿崩壊の一因は、間違いなくイエス様にもあったと、そのような理解が大手を振ってまかり通ることにもなるのでしょうか。しかし、そのことを危惧したファリサイ派の意見をイエス様ははっきりと拒否されてもいるのです。

そこで御言葉にもう一度聞いていくと、28節に「先に立って進み、エルサレムに上って行かれた」とあるように、このことはつまり、イエス様がメシアとしてエルサレムに入ることを自覚していたということです。ですから、「石が叫び出す」とあることは、そう意味で、イエス様ご自身が「イエスの時」の始まりを宣言しているということです。ただし、この「時の始まり」はイエス様の宣言に基づいてのものではありません。弟子たちが子ロバを連れてくる話がありますが、これは、ゼカリヤ書9:9の「娘シオンよ、多に踊れ。娘エルサレムよ、歓呼の声を上げよ。見よ、あなたの王が来る。彼は神に従い、勝利を与えられた者。高ぶることなく、ロバに乗ってくる。雌のロバの子であるロバに乗って」とある、この預言を引用してのものなのです。つまり、今やイエス・キリストというお方によってその神様の御心はその預言通りに成就したと、イエス様という存在を通して、御言葉は「イエスの時」の始まりを明らかにしているということです。そして、そ

ここで注目すべき点が、この自らの時が始まったことをイエス様が深く自覚しておられるということです。そして、もう一つ、「イエスの時」の始まりを宣言し、イエス様が人々の気持ちを奮い立たせようとしているのは間違いありませんが、けれども、人の気持ちを奮い立たせるその一方で、この先に待ち受けている十字架の出来事をイエス様はご存知であったわけです。

ですから、イエス様を中心としたこのメシア運動がまるで蜘蛛の子を散らしたかのように瓦解するのは、この十字架の出来事ゆえのこともあります。そして、それが一気に終わりを迎えたところに、この民衆運動の勢いの大きさを時の権力者たちがいかに恐れたかが分かるように思います。しかし、そこで忘れてはならないことは、イエス様には、この数日後のことがすべて分かっていたということです。ここに三日天下と言われているものとの違いを見ることができのですが、けれども、それが分かっているとして、イエス様は、民衆をたきつけるようなことを仰ったのでしょうか。それだけではありません。民衆を鼓舞させるということは、それだけ危険な状況に人々を巻き込むということです。しかも、それは、勝算があつたことではありません。イエス様を中心としたメシア運動が数日後には雲散霧消し、自らが十字架に付けられ、一切は終わる、このことを誰よりもよくご存知であつたのがイエス様であつたのです。そして、学者の見解では、その理由を預言の成就というきれいな言葉で片付けるのですが、それは確かにその通りです。ですから、それがこの御言葉を理解する上での最も正しい結論であるのは間違いありません。それゆえ、この一言ですべての矛盾を説明することもできるのでしよう。この危険を伴う民衆運動がひとりの犠牲者も出さずに収束することになったのは、この神様とイエス様の愛によるものであつたとの説明が成り立つからです。

けれども、ここで語られていることは、あらゆる意味で雄弁で、勢いがあり、その熱気がどれほど多くの人々を引きつけることになった、そして、それは事実その通りであつたと御言葉は語るのですが、では、そうした説明が繰り返されることで私たちはその説明に心からの納得を得ることが出来るのでしょうか。説明が繰り返されれば繰り返されるほど、沈黙せざる得ないのがこうして御言葉に聞いている私たちなのではないのでしょうか。それは、私たちと御言

葉との間には、どうしても距離があるからです。それゆえ、この隔たりが私たちに新たな謎を生じさせることにもなるのです。そして、この沈黙、私たちが黙らざるを得ないこの謎は、イエス様の気持ちが分からないということでもあります。そこで私たちは主イエスの気持ちになんとか分け入ろうと努力するのです。そして、拒まれそこで私たちはまた思うのです。十字架から復活へと向かうこの一週間とは、つまりは、私たちがこれより向かうところは高ぶることでもなければ、冷静になることでもない、主イエスと共にあることが私たちに沈黙させ、その謎を深めさせる一週間であると、そのような思いへと向かわさせられることになるのです。それは、十字架へと向かうイエス様と共に歩み、沈黙を味わうことなくしてその先はなく、また、共にあるということはそのいうものでもあるからです。ですから、イエス様がここで様々な矛盾を周到に用意しているのは、そういう意味で、私たちに沈黙の先に向かわせようとしているからです。それゆえ、私たちの関心を引く様々なものは私たちに沈黙へと向かわせる装置のようなものであり、私たちに復活の出来事に導くための器のようなものだとも言えるのでしよう。

そこで、ある人が、とある高名な学者の「私は私の信じているものを知らない」との言葉を引用して、「信仰とは、知り得ないものを信じるほかないという地平で起こる出来事である」と語っていたのを思い出すが、それは、「この知り得ないものを信じる」ということがまさに主イエスと十字架の道を共にするということでもあるからです。ただ、雄弁であることも、気持ちを高ぶらせることも、また冷静に物事に対処しようとすることも、そういう意味では、十字架から逸れる振る舞いであるようにも思うのです。それは、自らがつかみ取ったものでしかない、そうした雄弁さも、気持ちの高ぶりも、冷静沈着さも、自分にしがみつくだけのものでしかないからです。けれども、この十字架からの逸脱にイエス様は私たちに導こうとされている、雄弁な者は雄弁なままに、高ぶる者は高ぶるままに、また、冷静に思考できる者には冷静なままに、すべての者をそのままの状態に十字架へと導こうとされている、それがイエス様であつたのです。ですから、その振る舞いはまさに私たちが通常考えていることに従うならば、改めるべきことでもあるのでしよう。そのままにすることが私

たちを十字架から逸らすものであるなら、それは正さねばならないものでもあるからです。

けれども、正すことができず、そのことに疑問も感じず、人々が、私たちが、そのまま向かった先がイエス様の十字架の出来事でありました。だから、私たちは沈黙を強いられることになる、イエス様への謎を深めることにもなる、それゆえ、十字架の出来事は、まさに誰も知り得ないものをただ信じるほかない出来事であると言えるのです。まただから、謎は深まり、私たちは沈黙するしかない。けれども、その後何があったのか、信じることのできなかつた者がイエス様を信じる者へと変えられていったのです。それは、しがみつく自分自身をイエス様に向かって明け渡し、また、手放すことになったからです。そして、手放し、私たちが信じる者へと変えられていくのは、私たちがイエス様の出来事のすべてを言葉で上手に説明できるようになったからではありません。信仰とは、起こった出来事の概念化に成功することではなく、失敗し、失敗すればこそまた、そこで新たに経験させられるもの、私たちの信仰とは、この実体験に基づいてのものなのです。それゆえ、御言葉がここで私たちに伝えようとしていることは人生訓のような気の利いた知識、あるいは、ある境地に達するための方法論ではありません。信じることのない者が信じる者へと変えられるという、この起こりえない経験が、イエス様をして、また、イエス様を信じる人々をして、ここでこのように語らせているのです。そして、それは、限られたある特別な人々だけに赦されたものではありません。誰もがみんな、全て同じように許されていることなのです。

ですから、そういう意味で、私たちに常に求められていることは、分かった振りをするものではありません。分かろう、分かりたいと思うことはとても大事なことですありますが、何より大事なことは、経験として救いの出来事を私たちが実体験することなのです。そして、それが私たちに許されている。だから、私たちはその時を祈りの内に待ち望み続ける、そして、それが私たちに求められ、また望まれているのは、そこに神様に造られた私たち人間の真実な姿があるからです。ただ、そのために私たちは沈黙するしかない。それゆえにまた、謎が謎を呼び、いよいよ謎が深まり、身動きすることが出来なくなる。十字架か

ら復活の狭間に置かれた弟子たちが味わったものが、まさにこの沈黙であり、謎でありました。けれども、十字架の出来事の明後日、イエス様は弟子たちの前に現れ、御言葉がその預言通りに実現したことが明らかにされたのです。この言葉にならないものを信仰をもって信じているのが私たちであり、ただし、それは、だから、私たちの手の内に自分の好きに出来る、何か気の利いた答えが与えられたということではありません。私たちは依然として何も持っていないのです。十字架はそのことを明らかにしてくれているのです。けれども、その私たちがイエス様の復活の命に生かされている、じゃあ、それがどうして分かるのか、いよいよ始まる十字架の道行きの最初の日、イエス様はそれについてはっきりと知らしめてくださっています。

イエス様が涙を見せたのは、ラザロの墓の前とこの箇所二回だけなのですが、このイエス様の涙を私たちはどのように受け止めればいいのでしょうか。この涙は明らかな怒りをもって流されたものでもありませんが、この涙の意味を問い、実体験することになるのがこの一週間の私たちなのではないでしょうか。そして、このことはまた、イエス様が私たちそのものを、私たち一人ひとりをつぶさにご覧になっていることであり、あらゆるものにしがみつき生きようとする私たちを見つめ、イエス様は涙を流されたのです。ですから、その涙は私たちににとっては辛く、苦しいものでしかありません。しかし、このイエス様の涙を経験し、私たちは知り、また発見するのです。この私が見捨てられてはいない、イエス様に愛され、それゆえ、神様にも愛されていると、イエス様のこの涙の中にあるものを実体験するからこそ、この愛を私たちが我が事とすることになるのです。そして、それが今年も私たちに約束されている、許されているのです。ですから、そのためには他のものなど、もしかしたらどうでもいいことなのかもしれません。それは、この私のためにイエス様が涙を見せた、これに勝る恵みは他にはないからです。ですから、棕櫚の主日、私たちが知るべきことはこのイエス様の愛の中にあることです。そして、この愛の中でイエス様と共に十字架へと向かう、それが私たちであるのです。このことを心の中にしっかりと置き、受難週を歩んで参りたいと思います。祈りましょう。